群教セ	I01 - 01
	平 30.269 集
	特別支援教育

教材文を自ら進んで読み取ることができる児童の育成

――通常学級の国語科における「ことばの体操タイム」と教材文提示の工夫を通して――

特別研修員　石塚　愛子

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

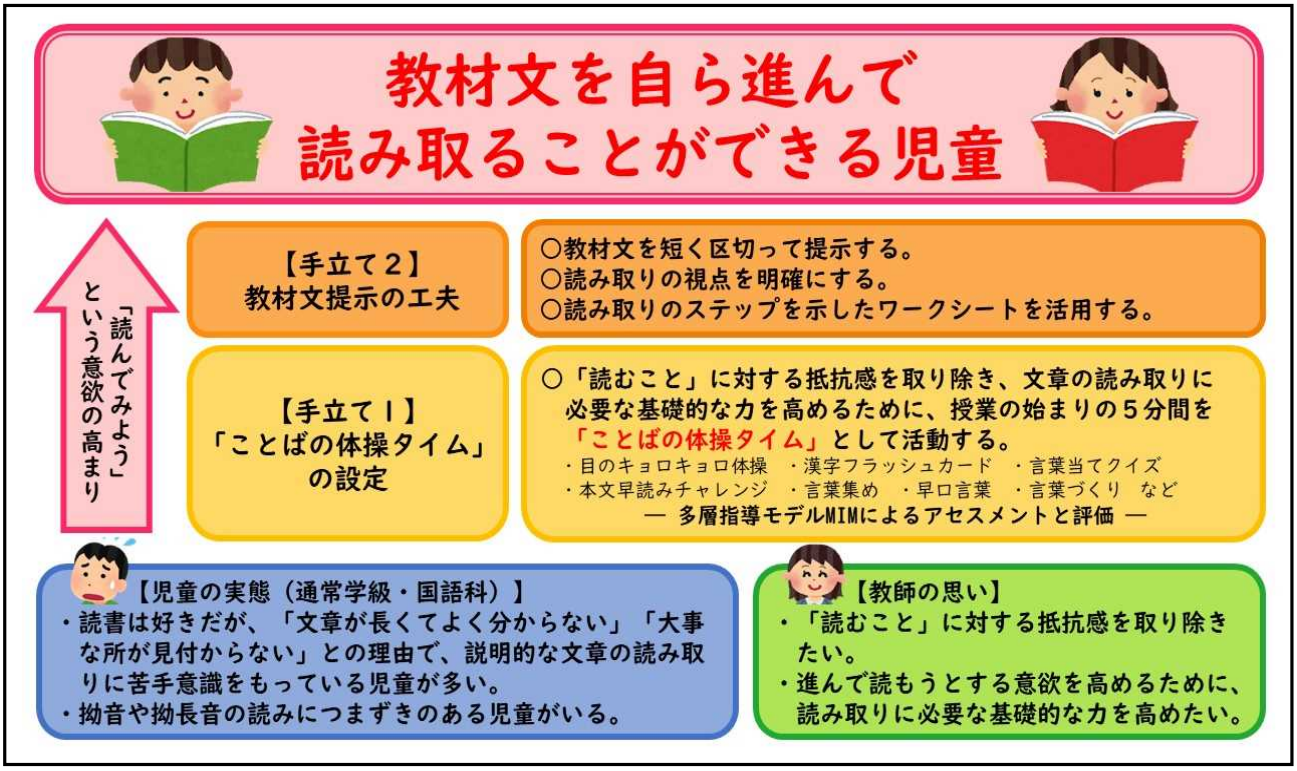
第２期群馬県特別支援教育推進計画（平成 30 年度～平成 34 年度）では、「通常の学級における特別支援教育の推進」として、「障害のある子どもに対応できる有効な指導・支援は、どの子にも有効な指導・支援である可能性がとても大きい」という立場に立ち、「すべての子どもにとって分かりやすい授業の実現」を挙げている。また、平成 30 年度群馬県学校教育の指針では、小学校学習指導要領（平成 29 年３月公示）の趣旨を踏まえた国語科指導の重点の一つに、「単元で伸ばしたい（身に付けさせたい）資質・能力の育成に適した言語活動を設定し、児童生徒が目的意識をもって課題解決に取り組めるようにしましょう。」を挙げている。

実践を行った学級で４月に実施した国語科に関するアンケート調査によると、「文章が長くてよく分からない」、「大事な所が見付からない」などの理由で文章を読み取ることに苦手意識をもっている児童が半数近くいた。特に、説明的な文章の読み取りに対して難しさを抱えている児童が多いことが分かった。また、多層指導モデル MIM（以下、MIM という）のアセスメント結果から、拗音や拗長音の読みにつまずきのある児童がいることが分かった。

そこで、「読むこと」に対する抵抗感を取り除き、文章の読み取りに必要な基礎的な力を高めるための活動を継続して行ったり、教材文を短く区切り、読み取りの視点を明確にして提示したりすることで、教材文を自ら進んで読み取ることができる児童を育成できるのではないかと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

読書が好きな児童が多いにも関わらず、「文章が長くてよく分からない」「大事な所が見付からない」といった理由から「文章を読み取ること」に苦手意識をもっている児童が学級の半数近くいるという実態を踏まえ、まずは、「読むこと」に対する抵抗感を取り除き、文章の読み取りに必要な基礎的な力を高める必要があると考えた。また、高学年となり、教材文の量が増え、読み取るべき内容が分かりづらくなっていることも大きな負担感につながっていると思われたので、それらを少しでも取り除き、児童自ら進んで教材文を読み取ることができるよう、以下のような手立てを考え、実践していくこととした。

手立て１　「ことばの体操タイム」の設定

○　授業の始まりの５分間を「ことばの体操タイム」とし、毎時間継続して行う（「６　資料」参照）。語句のまとまりを一目で捉えて理解したり語彙を増やしたりして、文章の読み取りに必要な基礎的な力が高まるように、「目のキョロキョロ体操」「漢字フラッシュカード」「本文早読みチャレンジ」「言葉当てクイズ」などを取り入れる。また、MIMのアセスメント結果から、児童が苦手としている拗音、拗長音について定着を図るため、「言葉集め」「早口言葉」「言葉づくり」などの活動を取り入れる。このような活動を計画的に継続して行うことで、文章を読むことへの抵抗感を取り除いていく。

手立て２　教材文提示の工夫

○　長い教材文を内容のまとまりごとに短く区切って提示する。

○　どんなことを読み取ったらよいのか、読み取りの視点を明確にする。

○　読み取りの手順をステップとして示したワークシートを用いることで、教材文を読み取りやすくする。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　授業の導入に、ゲーム感覚で楽しみながら活動できる「ことばの体操タイム」を取り入れたことで、「読むこと」に苦手意識をもっている児童も意欲的に授業に臨むようになった。MIM の結果から、文字を目で追うスピードが上がったり、言葉をまとまりとして一目で捉える力が身に付いたりしたことが伺え、文章の読み取りに必要な基礎的な力を高める上で、「ことばの体操タイム」は有効であった。また、単元で扱う語句を「漢字フラッシュカード」や「言葉当てクイズ」として計画的に取り入れたので、熟語の読み方や意味が分かり、自ら進んで読もうとする意欲の向上につながった。

○　長い教材文を内容のまとまりごとに短く分けたシートで提示したことで、92％の児童が教科書よりも「読み取りやすくなった」と答えた。提示される文章の量が少なくなったことで、「読むこと」への抵抗感が取り除かれたためと考えられる。

○　「文章を読み取ること」に苦手意識をもっている児童が 43％から 24％に減少した。読み取りの視点を明確にし、ワークシートに読み取りの手順を「ステップ」として示したことで、何を読み取ったらよいのかが分かり、教材文を「自分で読み取ることができた」と感じられるようになった児童が増えたためと思われる。また、ワークシートに読み取りのステップを示したことは、学習への見通しをもたせる上でも有効であった。

○　説明的な文章の単元終末に行ったテストの学級平均点は、期待平均点を 10 点ほど上回った。また、MIM のアセスメント結果を見ると、５月に比べ 12 月では総合点の学級平均点が７ポイント上がった。

２　課題

○　「本文早読みチャレンジ」や「早口言葉」など、学習の成果を数値化して記録する工夫をすれば、「ことばの体操タイム」に児童がより意欲的に取り組めたのではないか。

○　「文章を読み取ること」に苦手意識をもっている児童は減少したものの、依然として「読むことが難しい」「内容がよく分からない」と答えた児童もいた。今後も手立て１と２を継続して行っていくとともに、ワークシートの最後に達成度を自己評価できるような欄を設け、学習の振り返りの際に「読めた」「分かった」という実感がもてるような工夫をし、児童の苦手意識を取り除いていきたい。

実践例

１　単元名　　「説明のしかたの工夫を見つけ、話し合おう」
　　教材名　　「天気を予想する」光村図書（第５学年・２学期）

２　本単元について

「天気を予想する」は、理科で天気の学習をし、気象衛星の雲の写真で天気を予想するという学習を行った児童にとって、身近で興味深く読み進めることができる教材である。最初に文章全体を覆う大きな問いがあるのではなく、一つの問いに対する答えの中から新たな問いが生まれ、その問いと答えが三回繰り返される文章構成になっている。そのため、既習事項を活用することで、段落相互の関係を捉えやすくなっている。さらに、図や表、グラフ、写真などを根拠として用いながら事実を説明する部分と、筆者の考えを述べている部分とに分かれているため、要旨も捉えやすい。その反面、図や表、グラフ、写真などが多用されているため、文章の内容を読み取ることに戸惑う児童がいると考えられる。しかし、資料を活用しながら論を展開することの効果について考えたり、読み手を納得させるために筆者が用いている効果的な技法について気付いたりできる教材でもある。本単元で学び取ったことを生かしながら、次単元の「グラフや表を引用して書こう」において、図や表、グラフ、写真などを用いながら「暮らしやすさ」「暮らしにくさ」について自分なりの意見文（論）を展開する活動につなげていく。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し、実践した。

目標	・図や表、グラフ、写真等と結び付けたり、論の進め方について考えたりしながら、文章の内容を正しく読み取ることができる。	
評価規準	関心・意欲・態度	・「読み手を納得させる説明のしかたの工夫をさがす」という活動に、興味をもって取り組んでいる。
	読む能力	・図や表、グラフ、写真などと結び付けながら、文章の内容を正しく読み取ることができる。
過程	時間	主な学習活動
課題把握	第１時	・学習課題を知る。 ・学習の見通しをもつ。
課題追究	第２時 ～第４時	・「説明のしかたの工夫をさがす」という視点で「天気を予想する」を読み取る。 ・「問いと答え」による論の進め方、図や表、グラフ、写真などを用いることによる効果について考える。 ・要旨をまとめる。
まとめ	第５時	・「読み手を納得させる説明のしかたの工夫」をまとめる。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全５時間計画の第３時に当たる。児童は前時までに、本単元のめあて（「読み手を納得させる説明のしかたの工夫をさがす」）をつかんでいる。本時では、短く区切った教材文を読み取りながら、「説明のしかたの工夫」として、問いと答えを先に述べる論の進め方、効果的な資料の使い方に気付くことができるようにするために、以下の手立てを取り入れた。

手立て１　「ことばの体操タイム」の設定

○　授業の始まりの５分間を「ことばの体操タイム」とする。語句のまとまりを一目で捉えて理解したり語彙を増やしたりして、文章の読み取りに必要な基礎的な力が高まるように、「目のキョロキョロ体操」「漢字フラッシュカード」「本文早読みチャレンジ」「言葉当てクイズ」を取り入れる。特に、本時で新出となる熟語を「漢字フラッシュカード」にし、読みの定着を図っていく。また、本時のキーワードとなる「要因」「突発」「局地」などの熟語を「言葉当てクイズ」で出題し、熟語の意味が確認できるようにする。

手立て２　教材文提示の工夫

○　１枚のシートに二のまとまり（④～⑥段落）だけ短く区切ったものを載せて提示する。

○　読み取りの視点を「問い」・「答え」・「要因」、「文章と資料」の二つに絞り、読み取るべきことを明確にする。

○　読み取りの手順を三つの「ステップ」として示したワークシートを用いることで、教材文を読み取りやすくする。

4　授業の実際

(1)　手立て１　「ことばの体操タイム」の設定について

「ことばの体操タイム」では、本時で学習する二のまとまりの読み取りの助けになるような活動を計画した。まず初めに、「目のキョロキョロ体操」を行った（図１）。これは、文字を目で早く追えるようになることをねらいとした眼球運動のトレーニングである。１学期当初は、体や首が一緒に動く児童が多かったが、ほとんどの児童が眼球だけを動かせるようになってきた。次に、「漢字フラッシュカード」を読む活動を行った（図２）。これは、新出熟語の読みの定着を図ることをねらいとしたものである。１回目は読み仮名の付いたフラッシュカード、２回目は読み仮名のないフラッシュカードを用意し、スモールステップで読み方の定着を図ることができるよう工夫した。次に、「本文早読みチャレンジ」を行った（図３）。これは、本時で学習する二のまとまりを音読し、言葉のまとまりを意識しながら内容の理解を促すことをねらいとした活動である。１分間と時間を短く区切ることで、文字を目で追うスピードを上げることも目指した。読んだところまで日付を記入することで、読めた量が一目で分かるようにし、児童自身が成長を実感できるようにもした。最後に、「言葉当てクイズ」を行った。これは、本時で扱うキーワードの意味を確認するための活動である。本時では、二のまとまりを読み取る上で「要因」「突発」「局地」がキーワードとなること、また、児童の日常生活において馴染みがうすく、つまずきが予測されることから、以上の３題を出題した。教員が意味を述べ、その熟語を当てるというゲームなので、児童は本文を目で追いながら、楽しんで取り組んでいた。

図１　目のキョロキョロ体操

図２　漢字フラッシュカード

図３　本文早読みチャレンジ

(2)　手立て２　教材文提示の工夫について

本時では、児童の「読むこと」に対する抵抗感を取り除くために、長い教材文の中から二のまとまり（④～⑥段落）のみを載せた１枚のシートを使用した（図４）。どこから何を読み取ったらよいのか、読み取りの視点を絞り、④段落からは「問い」と「答え」、⑤段落からは１つ目の「要因」、⑥段落からは２つ目の「要因」を読み取れるようにした。また、読み取りの手順を「ステップ１」「ステップ２」「ステップ３」とワークシートに示したことで、ほとんどの児童が自分の力で「問い」「答え」「要因」の書かれている文を見付け出し、線を引くことができた（図５）。

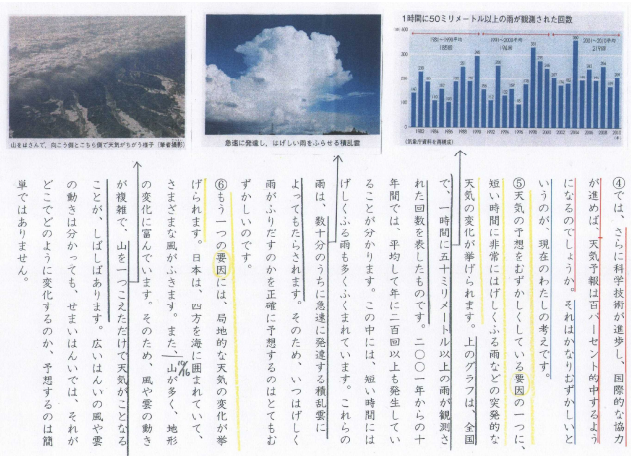


図４　二のまとまりのみを載せたシート

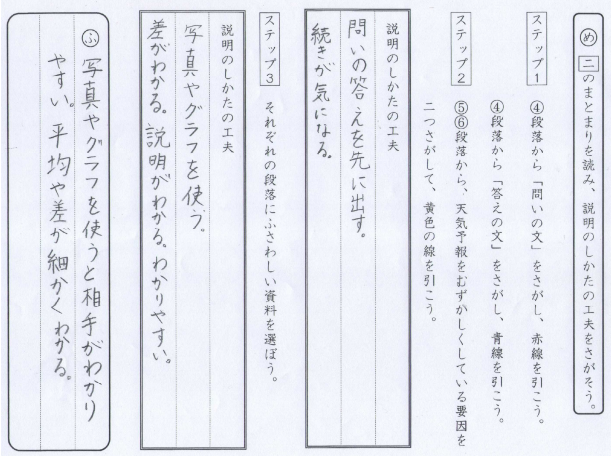


図５　読み取りの手順を示したワークシート

また、「問い」には赤線、「答え」には青線、「要因」には黄色い線を引くようにしたことが視覚的な助けとなり、「問い」と「答え」が先に述べられていること、理由となる「要因」がその後に述べられていることに気付くことのできた児童が多かった。さらに、④の段落を隠し、その役割を考えるようにした結果、「説明のしかたの工夫」の一つ目として、「問い」と「答え」を先に述べる論の進め方に気付くことができていた。

【児童の記述から】
・問いの答えを先に出すと、続きが気になる効果があると分かった。
・問いの答えを先に出すと、そのあとの理由を知りたくなるいい効果があることを知った。
・この文を読むと、問いの必要さがよく分かる。

次に、読み取りの視点を「文章と資料」に絞り、文章と合う資料の並べ替えを行った。児童には３枚の資料（グラフ１枚、写真２枚）を配布し、どの資料をどんな順番で並べたらよいのか考える活動を行った。その際に「必ず証拠の文を見付けよう」と投げ掛けたことで、児童は根拠となる記述を探しながら意欲的に読み進めることができた。また、意図的に資料を抜いておいたことで、資料がある時とない時を比べ、「説明のしかたの工夫」の二つ目として、資料の効果に気付くことのできた児童が多かった。

【児童の記述から】
・写真やグラフがあると、文章がより分かりやすくなることが分かった。
・文だけだと分からないこともあるけど、写真を使うと分かりやすい。
・グラフを使うと、平均や差が細かく分かる。

５　考察

「ことばの体操タイム」では、どの児童もゲーム感覚で楽しく活動を行っていた。①文字を早く目で追えるようになるための眼球運動「目のキョロキョロ体操」②「技術」「富む」など本時で新出となる熟語の読みの定着を図るための「漢字フラッシュカード」③本時で取り上げる部分を音読する「本文早読みチャレンジ」④本時で扱うキーワード「要因」「突発」「局地」の意味を確認するための「言葉当てクイズ」と、順番を決めて行った５分間の「ことばの体操タイム」での学習が本時の学習につながっていたので、「読むこと」に抵抗感のある児童にとっては、これらの活動が有効であったと考えられる。

しかし、「目のキョロキョロ体操」や「漢字フラッシュカード」のスピードについては、児童の実態を踏まえながら、今後調整していく必要がある。また、MIM のアセスメントの結果、まだ、拗音、拗長音につまずいている児童も見られた。動作化で音を示したり、児童同士で問題を出し合う機会を設けたりするなどし、今後も楽しみながら「言葉集め」や「早口言葉」、「言葉づくり」などの活動に取り組めるよう、工夫していきたい。

文章を読み取ることに苦手意識をもっている児童にとって、内容のまとまりごとに文章を短く区切って提示したことは、「読むこと」への抵抗感が少なくなり有効だった。ワークシートに読み取りの手順を示したり、「問い」「答え」「要因」という読み取りの視点を、赤、青、黄色に色分けしてカードで提示したりしたことも、児童が読み取るべきことを理解し、進んで読み取ろうとする意欲を高める上で有効であった。また、本時のめあてである「説明のしかたの工夫をさがす」という点では、「問い」「答え」のある段落をあえて抜いて提示したり、文章と合うように資料を並べ替えた後、資料がある時とない時の違いを考えることができるようにしたりしたことで、ほとんどの児童が読み手を納得させる説明の仕方の工夫に気付くことができた。

しかし、読み取りの視点を提示しても、自分の力だけでは見付けられない児童もいた。「文」の成り立ちや文末表現などについて全体で事前に確認したり、例文を出して考えるようにしたりするなど、丁寧に押さえる必要があった。また、児童によっては、「問い」「答え」「要因」の読み取りの際に、線を引くだけでなく、どうしてその文を選んだのかという理由や本時のまとめを自分の言葉で記述するなどのチャレンジ課題を設定してもよかったのではないかと考える。

６　資料

「ことばの体操タイム」で行う活動

活動名		ねらい	活動内容
常時活動	目のキョロキョロ体操	視覚機能を向上させる。	両手の人差し指を左右または前後に開き、指の先を交互に目で追いながら眼球をスムーズに動かす。
	漢字フラッシュカード	言葉のまとまりを一目で捉えることができるようにする。	本時で学習する部分から新出の熟語を取り出し、フラッシュカード形式で読む練習をする。
	本文早読みチャレンジ	言葉のまとまりを意識しながら、目で文字を追うスピードを上げる。	本文を声に出して、１分間でできるだけ早く読む練習をする。
	言葉当てクイズ	新出の言葉を正しく理解する。	意味だけを聞き、言葉を当てるクイズに取り組む。
適時活動 ＭＩＭのアセスメント結果から、定着が必要と考えられるもの	言葉集め	特殊音節（特に、拗音・幼長音）の入った言葉を適切な表記で書いたり、語彙を増やしたりする。	１分間でできるだけたくさんの言葉を見付けるゲームを行う。 （例：「しょう」のつくことば）
	早口言葉	特殊音節（特に、拗音・幼長音）の入った言葉を適切に発話したり、言葉のまとまりを意識したりする。	早口言葉の練習をする。 (例:きょうのきゅうしょくきゅうりとぎゅうにゅう)
	言葉づくり	特殊音節（特に、拗音・幼長音）の入った言葉を適切な表記で書いたり、語彙を増やしたりする。	ばらばらになった文字で一つの言葉を作るゲームを行う。（例：て　ゃ　じ　ん　し　➡　「じてんしゃ」）